

# 軍隊に適応した学徒兵のライフストーリー研究

渡辺 祐介<sup>i</sup>

「学徒出陣」から70年が過ぎた。これまでの学徒兵研究は主に特攻隊員となった者を対象とし、戦死の意味づけをめぐって懊悩する学徒兵の姿を明らかにしてきた。しかし、特攻隊員とは異なり、戦死について深く考えることなく軍務に精勤して〈やる気〉に満ちていた学徒兵の戦争体験は、ほとんど顧みられなかった。アジア・太平洋戦争の最末期、軍隊の初級幹部として戦争の遂行を支えた彼らの戦争体験については、理解が深まっていないのではないか。本研究は、戦争や軍隊に疑問や反感を抱いていたある学徒が、「学徒出陣」した後は次第と〈やる気〉に満ちて海軍将校となっていった社会過程を、彼のライフストーリーに基づいて分析した。その結果、彼の〈やる気〉とは、愛国心や憂国の情といったものと関係はなく、戦時体制という社会システムのなかで少しでも居心地のよいポジションを目指し、人生の課題・問題にポジティブに対処していった実践であることが明らかとなった。そうした彼のライフストーリーから、〈やる気〉に満ちて「楽しくたくましく生きること」が、社会的世界で戦時体制の維持につながっていることを、私たちは生々しく理解できる。

キーワード：学徒兵、「学徒出陣」、戦争体験、海軍将校、ライフストーリー、キャリア分析

## はじめに

学徒兵と聞けば、秋雨の降る明治神宮外苑競技場で行われた出陣学徒壮行会の映像がすぐ思い浮かぶ。戦争によって青春を失った戦没学徒兵たちの無念を、私たちは〈悲愴なわだつみ〉として記憶する<sup>1)</sup>。

しかし、学徒兵といっても多様であり、彼らの体験した戦争のリアリティとその意味づけは一樣ではない。とくに学徒兵研究については、西山伸が指摘したように「『特攻』に編制された学徒兵に特化しており、……一般的に『学徒出陣』に関してはその悲劇のイメージのみが先行し、客観的な事実さえも十分に捉えられないまま現在に至っている」状況で、事実関係の確定作業に加えて「もう一度体験者その

ものの目に可能な限り近づいて見つめ直す」(西山 2008: 47) 作業が喫緊の課題となっている。

死に直面している特攻隊員の場合、何のために戦うのかという問いは深刻であった。迫りくる戦死の意味づけと相まって戦争目的を真剣に考え抜き、手記を遺した者たちがいる。森岡清美は、特攻戦死した戦没学徒兵の手記を分析し、「天皇制国家の時代を超える特攻戦死の意味づけとして受け止めることができるのは、……愛する肉親を守り、美しい国土を守り、日本の国、同胞を滅亡から救うための捨身としての特攻戦死である」(森岡 1995: 292) という。大貫恵美子も、特攻隊員となった戦没学徒兵の手記を分析し、決死の覚悟と理想主義の探求から生じた「愛国心」のために戦ったという(大貫 2003)。郷土と家族、同胞を守るため、あるいは自らの戦死の後に理想の社会が到来すると期待する「愛国心」のためなど、明確な戦争目的を求めた学徒兵は特攻隊

i 立命館大学大学院社会学研究科研究生

員を中心にいた。

ところが、戦死を身近なことに感じない学徒兵のなかには、それほど切実に戦争目的を考えず、諾々と〈やる気〉に満ちて軍務に精勤した者もいた。大局的な戦争観を突き詰めることのない〈やる気〉に満ちた学徒兵については肯定的・否定的な見方がある。海軍予備学生を経て海軍士官となった阿川弘之は「少なくとも私や、私といっしょに大学を出て軍隊にはいった友人たちには、『やる気』があった。この戦争には疑問も持ち、それに軍隊の生活はつらくて淋しかったが、やらなくては仕方がないと思っていた」(阿川 1971: 169)と述べ、学徒兵の〈やる気〉そのものを肯定的に評価する。一方、やはり予備学生を経て海軍士官となった星野芳郎は「彼らは体は大きくても心は少年のレベルを超えてはいなかった。そしてただ従順に、運命の死を受け入れたにすぎない。……思想的に苦しむことも悩むことも出来ずに学友たちは死んだ。これが『きけ わだつみのこえ』の悲劇の本質である」(星野 2006: 84)と述べ、軍務に従順であった姿勢を「思考の切断」として否定的に評価する。しかし、こうした議論では、学徒兵が軍務に対してどのように〈やる気〉を培い、それを持続させていったのかというリアリティについては十分に捉えきれない。

〈やる気〉に満ちた学徒兵については戦中派論や人間類型などで理解することもできる。安田武は、学徒兵が自己に課せられた任務に献身する求道的で過剰な誠実主義と、軍人精神を拒否して自己の「精神の王国」を守ろうとした精神的貴族主義を「良質な世代的共有部分」としながら、それらの傾向が「現実には戦争協力という致命的な誤ちを犯した」(安田 1977: 248)とする。安田が指摘した戦中派世代の特性は、森岡が主に戦没学徒兵の遺書を「重ね焼き法」によって特定した「主体的(後に自主的と変更)役割人間・過程型」という人間類型とも重なる(森岡 1993)。また、鶴見俊輔は、自身の戦争体験と『きけ わだつみのこえ』に出てくる学徒兵を念頭に、彼らは戦争という国家の原犯罪に対して

反対犯罪を行う勇気が欠けていたとして、学徒兵の無条件の順法精神を批判する(鶴見 1968)。

しかし、「主体的役割人間・過程型」にも見られる〈やる気〉に満ちた学徒兵が戦時下の社会でどのように育ち、理不尽な出来事の多い軍隊にいかに対応していったのかということを詳細に考察しようとするならば、世代論や人間類型の特定といったアプローチでは限界がある。世代特性として、あるいは順法精神といった概念で学徒兵全体の生き方を概観してみても、そうした一般論の視点のみでは平面的な理解で終わってしまう。

そこで、戦中派世代の特性を複雑に語る学徒兵の戦争体験からも戦時下の社会における生き方を捉えれば、学徒兵研究は立体的に展開するものと考えられる。ライフストーリーに基づいて学徒兵の社会的世界<sup>2)</sup>に迫る意義はその点にこそある。本研究は、戦争や軍隊に疑問や反感を抱いていたある学徒が、「学徒出陣」後は次第と〈やる気〉に満ちて海軍将校となってゆく社会過程を分析し、彼の〈やる気〉がどのように生み出され、維持されたのかを明らかにする。

## 1 データと分析方法

### 1・1 データの概要と社会的位置づけ

本研究のライフストーリーの語り手、神田広志氏(仮名)は、大正12(1923)年生まれの大正育ちで現在91歳。昭和18(1943)年12月の「学徒出陣」<sup>3)</sup>のときには慶應義塾大学経済学部1年生で、海軍を志願して海軍予備学生<sup>4)</sup>に採用され、海軍少尉に任官<sup>5)</sup>したことを誇りとしている。筆者は彼に出会う前、慶應義塾高等部OBで、中国戦線の日本陸軍から逃亡した森岡嵐氏(仮名、現在97歳)のライフストーリー研究<sup>6)</sup>に取り組んでいた。森岡氏から「剣道部の後輩に面白い男がいるから、ぜひ話を聞いてごらんさい」と紹介されたのが神田氏である。

平成20(2008)年11月、筆者は3日間で計15時間のインタビューを神田氏に行い、そこでは聞けなかった少年時代の思い出を原稿用紙に90枚ほど書いて

もらった。これらのオリジナルデータから、ライフストーリーのトピックごとに整理して製本したものを本研究での分析データとする。加えて、補足インタビューからの抜粋や、筆者とやり取りした約40通の手紙も分析データとして用いる。

これまでも「学徒出陣」した予備学生のなかには詳細な手記を書いた者がいる。戦没学徒兵では、林尹夫（1980）、佐々木八郎（1981）、宅島徳光（1967）、和田稔（1972）などの遺稿が、学徒兵の思想研究の対象とされることが多い（大貫 2006；岡田 2009）。

生還学徒兵では、藤森耕介（1995）<sup>7)</sup>、平山浦生（2000）、岩井忠正・岩井忠熊（2002）、森嶋通夫（2007）、岡田英雄（1992）、吉田満（1981）などが手記を書いている。本研究では各書との詳しい比較分析をする余裕はないが、眼前の軍務に精勤していた誠実さという点において、神田氏も上記の著者たちと同様である。そして、特攻隊員となった岩井兄弟は除くとしても、生還した多くの著者は海軍に何らかのノスタルジーを持っている点も同様である。ただ、その度合いは、森嶋のように海軍を「愛した部分と憎んだ部分は複雑にからみ合い、いまでもなお分離することは難しい」（森嶋 2007: 119）というように一様ではない。これらの違いは各自の生活史や戦争・軍隊で実際に体験したことの違いによって生じたものと考えられる。神田氏が学徒兵のなかでどのような社会的位置を占めていた存在であるのかについても明らかにしたい。

## 1・2 データの分析方法と分析軸

ライフストーリーの分析方法として、キャリア分析の考え方を参考にする。宝月誠によれば、キャリア分析とは、①社会生活とそこで展開される他者との相互作用が個人に課す「課題」や「問題」を析出し、②析出した「課題」や「問題」に当該個人がどのように対処したかその適応過程を分析して一つのキャリア位相とし、③生活史の中で明確になったキャリア位相間の関連を分析する3段階のステップからなる（宝月 1990: 180-90）。

本研究のキャリア分析では、戦時下の学徒にとつて大きな「課題」や「問題」であった戦争・軍隊との向き合い方について、神田氏自身がどのように意味づけ対処していたのか理解することに重点を置いた。ライフストーリーを読み直すと、戦争・軍隊について彼の意味づけは揺れ動いているように思われる。よって、彼の人生の各キャリア位相における戦争・軍隊との向き合い方を、個人が辿った社会過程としてリアルに把握することが重要となる。

森岡は「戦中派体験は戦時下の学寮および学校教練に遡ると考え」（森岡 2013: 14）、中等教育以降の学校生活に軍隊生活との親和性を指摘しているが、本研究も、従軍体験や空襲体験などに限らず、戦争ごっこや軍事教練など戦争・軍隊との向き合い方に少なからずインパクトを与えたものを戦争体験とする。よって、神田氏のライフストーリーの分析軸は、彼の幼少期から終戦までの各キャリア位相において、諸々の戦争体験にインパクトを受けながら彼がどのように戦争・軍隊と向き合っていたかというラインに絞られる。

次節では、神田氏が優秀な学徒出身の海軍将校となってゆく社会過程を明確にするために、彼の戦争体験をめぐるライフストーリーを大きく4つのキャリア位相に分けて説明してゆきたい。

## 2 キャリア位相の分析

### 位相1 「軍国少年」として

#### 早熟な「神田っ子」

神田氏の実家は、長野県伊那出身の父母が一代で築いた従業員五、六名を雇う神田駅前の青果店・フルーツパーラーで、自称「小商人の倅」である。暮し向きは中間層に位置づけられる。幼年期は上野で過ごし、父母はしばしば長野から来た知人を東京見物に連れて行ったが、彼は動物園もデパートも「飽き飽きして」いた都会人として育つ。閉店際に近所の番頭格が遊びにきては「定番の話題が女郎の品定め」であったという。耳学問によって花柳界を身近

なものとして育った早熟さもあった。

小学校4年生のとき、店の移転に伴って神田へ引っ越す。『コノヤロー』『テメー』と、もう乱暴な言葉の悪さにビックリするが、頭の回転のメチャメチャに早い級友にもまれ、彼も頭脳明晰で勇み肌の‘神田っ子’らしいアイデンティティを培ってゆく。

#### 〈ほどほどの役職〉という社会的‘成功’の基準

小学校から続く神田氏のユニークな生き方として、級長など所属集団の〈ほどほどの役職〉に付くことを目標とすることが挙げられる。「一学期の正副の級長が、クラスの一人目と二人目の実力者である。二学期になると、正副級長が選ばれる。級の三番、四番の実力者である。三学期になると、五番六番の実力者である。私は三学期の級長に選ばれた。……五番目にランクされたわけだ」。このように、彼は所属集団のフォーマルな役職でもって社会的位置を測るわけだが、彼自身トップを目指すことはなく、ほどほどに上位の社会的位置で満足する。背伸びせず、されど怠けることなく、彼は〈ほどほどの役職〉に付くことを社会的‘成功’の基準としてゆく。

#### 商業学校で培った‘実学的教養’

昭和11(1936)年、神田氏は店を継ぐことが念頭にあったので、東京市立京橋商業学校(後に芝商業学校と改称)に進学する。当時のエリート学生が中等教育を旧制中学校で受けて文学書を耽読し始めた時期、彼は「(成績が全体の)1割くらいに入るように、せめて副級長くらい努めたい……と、大それた目標を立て」珠算塾にまで通って成績の向上を目指していた。「簿記は試算表から決算書表を作る、商品学の大半は理解している、商業法規も大半は理解できている。卒業したら有能な事務員として仕事ができそうだ。へたな大学出よりも役に立つだろう」と述べる‘実学的教養’は商業学校で培われ、‘一高-東大’に通うような学徒と同様の‘思想的教養’は部分的にしか持ち合せていなかった。なお、親に増築してもらった屋上の個室に籠って猛勉強を

したが「芝商の成績は四年は佳良、どうしても優等は取れなかった。従って、級長、副級長は経験できなかった」。

#### 『のらくろ』世代の〈軍国少年性〉

昭和6(1931)年から、『少年倶楽部』に田河水泡の『のらくろ』の連載が始まる。神田氏が小学校1年生から2年生になるときであった。彼は当時について「軍国少年世代の私が最初から飛びついて愛読しました。……二等兵、上等兵と昇進するので、こちらも盛大に応援しました」と回想する。教室で戦争物の冒険小説を教頭も交えて音読することもあった軍国主義の時代である。初等教育の期間に軍人や‘戦い’に憧れる〈軍国少年性〉を大いに育んだ。それは野球などに比べて、戦争ごっこ‘水雷艦長’を別格と懐古することからもうかがえる。

商業学校に進学すると軍事教練が始まる。「1年、2年の間は、ゲートルを巻いて、オイッチニ、オイッチニと膝を上げた軍人の歩き方の練習を繰り返させられる。軍国時代だから、軍人の訓練は面白いはずだが、同じことの繰り返しで、飽き飽きしてしまう。……教練という時間は、本当にもったいない時間だった。そのうちに、本物の小銃を渡される。軍国青年らしくなる。菊の紋が彫ってあり『陛下から下さったのだ』ということになっていた。これを担いだり下げたりの繰り返し」。彼は商業学校から剣道部に所属して体力も充実していたから、軍事教練も難なく対処できたが、単調な教練に〈軍国少年性〉がくすぐられることはなかった。

#### 位相2 「慶應ボーイ」として

##### 銀座通いに熱心な‘不良学生’

昭和16(1941)年4月、憧れの横浜高等商業学校を「案の定」不合格となった神田氏は、「学問の深奥」までも勉強する気のない私にはぴったりの慶應義塾高等部に入学する。就職するよりも「学生の方が楽だから……という仕様のない学生でした」。

席順に従い担任からクラス委員を頼まれた彼は



「喜んでお受けする」。商業学校の先輩の勧誘で剣道部に所属するが、クラス委員の仕事や2年生から始めた銀座通い、そしてNP（軟派の隠語）に忙しく、熱心には道場に通わなかった。1年生のときの成績は‘全優’であったが、銀座通いとNPが祟って2年生からは成績が悪化し、担任に「この学生は少し見損なった」と言われた。「年上の同級生と喫茶店でタバコを吸っているところで捕まって、警察の柔道場に正座しろって言われて、しぼられたこと」もあった彼は、従兄弟に「お前、不良になった」と言われた。「『不良になったとは言うけども、俺は人間的には内面から充実した真剣な生活を送ってんだ』なんて、自分で勝手に解釈してましたけどね」。

彼は「学校の優等生じゃなかった」。銀座を「級友と歩いてお茶を飲んで、駄弁っていると楽しい」というやや‘不良’の「慶應ボーイ」であった。卒業と同時に徴兵されることが確実な時代、せめていまだけでも青春を楽しみたいという生き方は、彼に限った話ではなかったろう。NPを繰り返しながらも「特定の女性と一切の予約なしで風来坊で軍隊へ入るよう心がけていた。求めながらも拒否していた不思議な青春であった」という彼のストイックな一面には、やはり戦争の影が感じられる。

### 揺れる日米開戦の受け止め方

高等部1年生のときの日米開戦は、徴兵適齢も迫っていたため、他人事で済まされなかった。神田氏は開戦の一報を深川の親戚宅で知る。彼は商品学の知識があったので物量の不利を話すと、伯母（東京大空襲で従妹と共に戦没）に「何よ、そんな悲観的なこと言わないでよ。日本ってのは、よその国と戦争して負けたことないんだから、大丈夫よ、必ずこの戦争勝つに決まってるんだから」と反論され、憂うつになって「しよほしよほしてうちへ帰ったんですけどね。そしたら、大本営発表がありましてね、真珠湾攻撃の戦果が発表になって、あれ聞いて、あれ、これはすごいことをやったなと思ってね。……これはひよっとしたらいいところまでいけるんじゃ

ないかなと思って、……初めてあの戦果を聞いたときから、街の中の街灯が一斉に点灯されたような気がしました。……戦機としてはいましかしょうがなかったのかっていうふうに、それがいまの指導者としては、この時期が戦争おっ始める一番の理由だったのかなというふうに判断して、しょうがなかったのかなと思いましたけどね」。しかし、「学徒出陣」のころには戦局の悪化を冷静に受け止め、再び「勝てるはずのない戦い」<sup>8)</sup>と思うようになっていた。なお、大東亜共栄圏のための聖戦といったことを信じたことはなく、「資源の配分をめぐる戦争」と捉えていた戦争観に変化はなかった。

### 〈反陸軍性〉と〈軍国少年性〉の混在

夏休みに軍人勅諭を清書する宿題が出された。皆が半紙に書いてきたなか、一人だけ上質の和紙に書き、数円かけて表具屋で巻物に仕上げた級友がいた。クラス委員だった神田氏は「お前、こんな物作ったら、教官に怒られるぞ」と注意する。しかし、教官は「この学生は、誠心誠意書いた宿題を、こんなに立派に表装して、大事にして立派にして持ってきた」と誉め上げた。「何だこら、『一軍人は質素を旨とすへし』ってあれが、質素でもなんでもない、ただ学生の宿題にこんな大金をかけて、注意されるのじゃないかと思ったあたりから、軍隊ってのはちょっとわれわれの実感と違うなっていう感じがしましたね。……この辺から陸軍嫌いになりましたね」。

昭和17（1942）年10月には学内に報国団が結成され軍事色が強まってゆく。「学生のクラスの名簿なんかが新しく変わってきて、……A組、B組って言ったのが、陸軍の1小隊、1中隊、第3大隊とか、そんなふうになんか変えちゃって、……まったくクラス名簿じゃなくて、何だか戦争体制に組み込まれちゃって、学生もわれわれクラス委員っていうのがいても無視されちゃって、陸軍の将校から気に入った学生を（報国隊の）指導者に指名して、それが下級生の面倒を見るとかいうことを言い出して、これじゃ学校のクラスの編成がめちゃくちゃじゃない

かって、抗議に教官の自宅へ一人で訪ねて文句言ったんですけどね<sup>9)</sup>。しかし、報国隊のあり方について議論は折り合わなかった。そればかりか、入営の際には反軍的と内申され、幹部候補生から除外される危険を感じたので、このころから海軍を志望するようになったという。

配属将校と反りが合わずに〈反陸軍性〉を培ったが、高等部や大学においては軍事教練のレベルも高くなるものと期待するところが彼のユニークさである。「専門学校程度になったのに、どうして中等学校の教育をまた反復練習すんのか」と思って、ちょっとも進歩がないんですね。高等部を卒業し「大学になったのだから、……今後は戦略的な初級士官教育の初歩、戦術的な学問を少し教えてくるかなと思ったら、何にも教えないんですね。……全然進歩がないんですよ」。学内自治への軍国主義の侵入には反発しながらも、軍事教練に初級士官教育を期待するなど、〈軍国少年性〉は燻り続けていた。

では、高等な軍事教練を受けて戦場に行きたかったかという、そうではない。すでに繰り上げ卒業が実施されていて昭和18年9月に高等部の卒業が迫ると、母親の勧めもあって10月に慶應義塾大学経済学部(本科)に進学する。進学動機には徴兵猶予を期待するところがあった。「で、やれやれ、当然、軍隊には行かなくていいし、大学生活が送れると思って構えていたら、だんだん世の中がおかしくなってきた」進学と同時に「学徒出陣」となってしまう。

### 「学徒出陣」はしょうがない

昭和18年9月22日夜7時半、学生の徴兵猶予停止を含む国内態勢強化方策が発表された(10月2日、在学徴集延期臨時特例公布)。「ある日突然、学校へ行ったら、もちろん朝寝坊して新聞読まないで学校行ったら、クラスの中が騒然としてましてね、先に来た友達、『よし！ やるぞ、がんばるぞ』なんて興奮してえらい気合いが入ってて、おっきな声出していましたよ。『いったい何?』つったら、『徴集延期がなくなっちゃった』と、『もう学徒出陣だぞ、軍

隊入るんだ』って、『ここで覚悟決めなきゃいけないぞ』ってこと、みんな口々に叫んでいました」。神田氏に気負いはなかった。「(召集が)いつ来るかわからないとは思ってましたから、いよいよ来たなと思うだけで、びっくりするわけでもないし、しょうがないな、来たのかよっていう感じでしたね。……同年輩がみんな戦地に行ってるんだから、しょうがないねえという感じでしたね」。

### 「スマートな海軍」に期待する〈親海軍性〉

「学徒出陣」が決定すると、「海軍報道部の平出英夫大佐は、海軍は学生諸君の『知性』に期待する、という談話を発表して、学生たちを喜ばせた。……海軍予備学生の合格不合格に関して配属将校の『内申』は採用しない、という海軍側の発表にも救われた」(安田 1977: 124) 学生は多かったろう。神田氏も迷わず徴兵検査で海軍を志願することになる。

軍事教練で絞られ、学内自治に圧迫を加える軍部は配属将校と共に陸軍として象徴されていたことは重要である。学校生活において海軍は「サイレント・ネイビー」という存在で、ときたま街上で見かける短剣を吊った海軍士官のスマートな姿から、陸軍とは異なる何かを過剰に期待するようになり〈親海軍性〉を培う者もいたと思われる。

彼が海軍を志望した社会背景には慶應義塾という校風も指摘できる。「KO ボーイたちは、一般に都会の豊かな中流階級の子弟で、スマートな点は陸軍よりは海軍に似ているといわれ、比較的海軍志願が多かった」(白井監修 1999: 39) とされる。剣道部の先輩にも予備学生を経て海軍士官となった者がおり、彼も部活動の折に勧誘を受けたことがあった。また、当時の塾長小泉信三の長男信吉(昭和17年に戦死)は海軍主計科士官だったので、「私たちが皆、塾長の息子さんに続いて海軍に行こうかなという気運もありましたね」。

### 〈生還という前提〉

10月21日、神宮外苑競技場で出陣学徒壮行会<sup>10)</sup>

が行われる。出陣学徒代表答辞にあった「生等もとより生還を期せず」<sup>11)</sup>という一文を、森岡は「彼らの真情の率直な吐露以外のなにものでもなかった」(森岡 1993: 72)という。神田氏はそうはとらなかつた。「こっちは『冗談じゃないよ、俺まだ戦死しようとは思ってねえぞ、冗談じゃない、ためえ一人で張り切んなよ』ってこと、思わず口ずさんでいましたね」。「私は全然生還を期したままで、私、死ぬと思っていなかったすね、兵隊のときにね。(海軍に)入ってからも、もちろん、俺は死んじゃうなんてことはまず考えらんないと。そんな死ぬようなことを言うこともないし、そういうことは言わないと思ってましたし、……死ぬということは一切思わなかつたすね。思っちゃいけないなと思ってましたからね。……『私は死んで帰ります』なんて言ったやつや、おどおど逃げ回ろうとした人が案外死んだりしてますね<sup>12)</sup>。私なんか、朗らかに、楽しく暮らそうじゃないかと思って、終始一貫大体そういう感じで終わりましたね」。

### 位相3 海軍予備学生として

#### 制裁はなかったが空腹感に苦しんだ新兵教育

昭和18年12月9日、神田氏は横須賀第二海兵団(後に武山海兵団と改称)に入団する。慣例として海軍士官は現役・予備とも志願制で、通常は水兵を経ないで海軍予備学生に任命されたが、「学徒出陣」組のみ徴兵による入団なので、二等水兵から海軍生活を始めることになった(蜷川 1998: 92)。武山海兵団では出身大学別に分隊を編制し、「精神棒」による制裁を禁止するなど海軍側も配慮した<sup>13)</sup>。彼は新兵教育で殴られたことはなかったという。「教班長は下士官たちで、今度の新兵は大学生ばかり、予備学生になる要員ばかりだから、ぶん殴っちゃいけないって上から厳重に言われていたようでした」。予備学生採用を前提とした新兵教育では教班員は学徒兵だけで、教班長も「性格温和で頭腦のよい成績優秀な下士官」が選ばれたという。陸軍のように古兵から学歴を妬まれていじめや制裁を受けるといっ

たことが、海軍では組織的に制限されていた<sup>14)</sup>。

新兵教育は「こっちは体育会にいたから肉体に苦労じゃないわけです。剣道部の稽古よりは、いまでも言うんだけど、軍隊の訓練の方がよっぽど剣道部の稽古より楽だよ」というものであった。ただし、食べ盛りの学徒兵にとって慢性の空腹感だけは対処に困る「問題」であった。食卓番のときに自分の食器に飯を詰め込むテクニックもあったそうだが、教班長も心得ていて食卓の準備が整った段階で席順を変えさせることもあったので、効果的な対処法とはならなかった。「毎日毎日、空腹で、食事が始まると、食べ終わった途端に腹減ったっていうくらい、お腹すいてましたね。そのころ、一合二尺ぐらいは食べてるんだって言うんですよ。配給はちゃんとやってんだけど、俺たちはいくら食べても足りないっていう。頭は全然使わなくて、体操駆足、戦技など肉体を使うばかりです。間食なし、定量という精神的飢餓感です。……おやつが全然ないんで、明日の朝まで腹がすきっぱなしで我慢しなくちゃいけない、何かちょっとつまみたいと思ってもできないことが、ちょっと間食をすることが皆無という禁断状態で、それは余計精神的に辛かったですね。もう、その腹が減った辛さは、たまらなかつたすね」。

#### ‘科学性・合理性’のある海軍

軍隊生活の基礎を手取り足取り教え込む教班長は、初めて付き合う上官である。元少年兵の手記では、厳しくも頼もしい兄貴分として描かれることがある(増間作郎・菅原権之助 2002)。しかし、学徒兵にかかると軽口の対象とされた。「『歯磨くときの、どうしろとかこうとかの注意の中に、割合に合理的な言葉が結構出てくん』なんて、みんなで言いましたけどね。まあ、下士官の中には中等学校卒業した下士官が結構いましたから、『本来、陸軍だったら将校になれちゃった人たちだけだな』なんて言ってる」。下士官の些細な注意に‘科学性・合理性’を見出しては、陸軍と比較して海軍の美点に感心する。陸軍を比較準拠集団にすることによって、海軍での

生活はまだ恵まれていると意味づけて〈親海軍性〉を増強させ、神田氏は軍隊生活に適応していった。

### 鉄拳制裁へのポジティブな適応

昭和19(1944)年2月、神田氏は予備学生に採用される<sup>15)</sup>。「予備学生の試験が受かって、何が嬉しかったかっていうと、……これでもって、私はこれから先、将来、陸軍から召集令状は来ない、あー嬉しい、と思いましたがね、心から。……しかも、水兵さんになんなくても済んだと」。新兵教育から解放された喜びに包まれ<sup>16)</sup>、読書談義など雑談の輪も賑やかとなり、「(旧制高校出身ではない)僕たちは寮生活じゃないでしょ。だから、ほんとに(海兵団は)全寮制の24時間教育でしたからね、朝から晩まで。だから、そういう点じゃ大変面白かったですね」という。彼にとって予備学生基礎教程は、学窓からの断絶ではなく、連続のように受け止められた。

ところが、予備学生となった途端、教官から鉄拳制裁(「修正」と称した)を頻繁に振られることになった。「さあ、士官の区隊長連が、皆、『俺たちの後輩が入ってきた、学生として入ってきたんだ』っていうんで、張り切っちゃって、それからは盛大にぶん殴られましたね」。個人的に過失がなくても、連帯責任として鉄拳を受けなかった者は皆無である。

鉄拳は口内が切れて唾に血が混じるほどのもので、ときには歯が折れ脳震とうを起こす暴力である。軍隊生活で初めての本格的な暴力を、彼はどのように感じていたのか。「何かっていうとパンパンッ!とぶん殴られましたね。それが自分たちの後輩を、早く一人前にしたいからってところで、まあ、だから、べつにぶん殴られても、そんなに不愉快なあれは受けなかったですね。口で細かいことをくどくど注意するよりも、パンパンと一発ぶん殴って『終り』と言ってくれる教官の方が評判が良かった<sup>17)</sup>。私は一回も、そういうことで嫌な思いをした、嫌なやつに殴られたなってことは、ありませんでしたね。他人や嫌な奴に殴られるのではなく、兄貴たちの愛情のこもった一発でしたから素直に殴ら

れました」。

凄惨なイメージのある軍隊の鉄拳制裁について、彼がポジティブに意味づけることができたのはなぜか。鉄拳を振る区隊長(教官)のほとんどは商船学校や水産講習所、または一般の大学等を卒業した第一期兵科予備学生出身の予備士官たちで、軍歴ばかりか学歴においても先輩であった点が重要である。陸軍のように学歴を妬まれて古兵から陰湿ないじめや制裁を受ける感じはなく、同じくインテリで‘教育熱心’な区隊長の鉄拳は「愛情」という意味づけも可能であった。また、彼の所属した5区隊の多久正史区隊長(小樽高商卒)が好漢だった幸運もある。藤森は「多久中尉は第一期予備学生出身で常に我々の味方だ。専門の陸戦訓練の時は厳しく恐ろしいが、平素は先輩らしく親身になって我々に暖かく接し、個人的面倒まで見てくれる。本気で制裁を加えることもないし、分隊監事や他の区隊長にしっかりしぼられたあとは、こっそり慰め励まし忠告してくれることもある。また他の区隊長不在の時は息抜きもさせてくれ、誰からも慕われている。この区隊長の下にある五区隊員は……明るくのびのびしている」(藤森 1995: 140-1)と羨んでいる。

### 〈学徒兵のプライド〉

神田氏を始め「学徒出陣」組の予備学生は、予備学生教程の折々に〈学徒兵のプライド〉を奮い立たせる言説に触れ、職業軍人に対抗する意識を培った。ある区隊長H中尉が予備学生を激励したエピソードはその典型である。「巡検が終わって寝っていると、……ハンモックの棚の上に突っ立って『お前ら聞け!』って始まるわけですよ。Hさんの声がわれわれの方にも聞こえてくるのです。『お前たちは大学へ通っているのに、心ならずも陸軍の職業軍人が始めた戦争に無理やり助っ人として呼ばれて海軍へ入ってきた』と。……『学生出身の予備士官は、何も好んで手伝いをしているわけではない。この連中が始めた戦争が始末ができなくなったから俺たちが手伝いに来てやったんだ。それなのに、彼らは助っ人



に対する礼儀が足りない。上官っていう名前でもって、俺たちに君臨してる。けしからん』と。『われわれは、彼らがいろんな文句をつけられぬように助っ人らしく、学生のプライドをもって接して、彼らに付け込まれぬように、……細かい注意をするよう気をつけろ！』っていう訓示を毎回言うわけですよ。……僕は、なるほど、そういう考えもあるよな、考えてみりゃ好きで軍隊に来たわけじゃないし、それがあの連中に追い回されているが、何にもこっちは好きで追い回されに来ているわけじゃないんだということを肝に銘じて、予備士官同士の先輩、学校の先輩の言う事は素直に聞いて生活しようと思ってきました<sup>18)</sup>。

#### 学校生活と軍隊生活の親和性

神田氏は、学徒出身の教官や同期生に囲まれ‘学び’に専心する日々を「楽しかった」と何回も繰り返す。ある区隊長I中尉は慶大の先輩で、規則違反ながら巡検後に区隊長室に遊びにいて飴玉をもらい、第一期予備学生出身の予備将校として海軍兵学校（海兵）出身将校から差別された苦労話を聞かされることもあった。日々の課業は「陸戦とかカッターをするときは体を動かすのだけれど、座学ときは、大体、鞆の中に教科書入れて出かけてって、教室へ入って並んで講義を聞いているだけでよかったすからね。居眠りさえしなきゃ、結構面白かったですよね。いろんなエンジンが、どういう具合で船を動かしてるのか、……そんな話もなるほどなって利口になったりして。まあ、大砲に対する知識なんかも、もちろん陸戦の中の知識も出てきて、機関銃はどんな性能でどうなんて話もありましたけど、そんなことを学んでいたから楽しかったですよ、私は若いし、面白かったですね」という。座学は〈軍国少年性〉をくすぐる軍事学<sup>19)</sup>から、純粋に知識欲を満たす航海学や物理学、化学など多岐にわたった。鉄拳制裁や自由の制限を除けば、予備学生教程は学校生活と親和性のある環境で、試験対策では受験勉強で培ったノウハウを生かせる余裕もあった。

また、予備学生教程における軍隊生活は、学生の「自治的運営」が基本とされ、藤森は「軍隊にあって『自治』という意表をついた言葉に驚く」（藤森1995: 93）と書いている。「我々の内務生活は上官の命令ではなく、学生の中から指名された伍長、伍長補、甲板学生と、週毎に交替する当直学生（大隊の統括）、副直学生（分隊の統括）の指揮命令」（同: 98）で動くものであった。誰もが学生役員になれるわけではなく、成績と〈やる気〉が認められた優秀な学徒兵が選ばれたが、集団生活の世話役であるために苦労も多い。大きな行事があるときなどは「副直学生と甲板学生が主役で大張り切り。走り回り、世話をやき、全般作業の推進と結果の入念な点検に追われ、すっかり疲れ切る」（同: 131）役職であった。

区隊長に認められ、神田氏は甲板学生となる。「学校のときにクラス委員みたいなことやってましたからね、嫌じゃないっていうか」。嬉々として働く姿勢が評価され、続く術科教程では班長に推薦される。伍長や伍長補など、分隊や区隊のトップにはならないものの、甲板学生という〈ほどほどの役職〉に付いて所属集団の上流にいることを誇りとする生き方が、軍隊への適応をさらに促進させた。

#### 陸軍や「小僧さん」という比較準拠集団

寮生活に似て「楽しかった」とはいえ、隙を見せれば鉄拳が飛ぶ軍隊生活に、神田氏も辛さを感じることはあった。「僕たちも軍隊が辛い、大変早く任官したい、ちょっと家へ帰りたい、そんなに願っている中でも、今日はいま幸せ、良かったということが、そういう時間がいくつかありましたからね」。辛いことがあっても、落ち込む暇はなく次の課業がやってくる。「ヨットに乗かって、みんな空を眺めて、江の島見ながら、風がいい加減に吹いてきて、快適だな、なんて思っていましたけど。陸軍じゃ、こんな醍醐味は味わえないなと思いましたけどね」。

また、「辛い辛いって、……考えてみると、家なんかでも、小僧さんが田舎から来たりするでしょ。

……半年ぐらいは家に帰れないすよね。そんな子供が家へ来て、住み込みで来て働いてるのがいるのに、こっちは二十歳過ぎて立派な男子で、家に帰りたい、悲しいなんて、ちゃんちゃらおかしいと、家の小僧たちに顔向けできないじゃないかなと思いましたからね。そんなときに、そうだ、あの連中のこと思えば、恵まれてるから、あんまり、家へ帰りたいなんて言ってもな、いい年してと思いましたね」。

#### 位相4 海軍将校として

##### 〈将校の役割〉の自覚

昭和19年7月、基礎教程を修了した神田氏は、術科教程は陸戦専修となり、館山海軍砲術学校に入校する。軍艦に乗りたくて通信科を希望した彼にとって、陸戦専修は不満であった。陸戦班に来た者は「みんな身体壮健な連中ばかりで、相撲部や柔道部にいたんじゃないかっていうような、がっしりしたのばかりで……どうせ俺たちは体で御奉公だ。頭空っぽだけど、体だけは丈夫だよ」と自嘲していたという。教官も草色の第三種軍装で、短剣でなく軍刀を吊って号令も鋭く迫力があり、「鬼の館砲」は武山海兵団と比べて異様な雰囲気だったという（藤森 1995: 185）。

しかし、課業は〈軍国少年性〉をくすぐるものが多かった。「私も館山ってのは陸軍の（ような）教育だとは思って来ましたが、面白いんですよ、やっぱり海軍の方が合理的だなと思って」。一人の将校が扱う専門兵器を限定した陸軍と異なり、陸戦班の教育は小銃や機関銃から始まり、高角機銃、迫撃砲、山砲、野砲、速射砲など幾種もの兵器の習得を短期間で目指したという。

武山海兵団の基礎教程では「自習時間はお互い想い出話で時間をつぶしていました。ずっと面白くて、人間的な触れ合いが非常に多かったんですけど、館山へ行くと忙しくて、割合にお互い同士が胸襟を開いて世間話、昔の想い出話なんかやってる暇がなかったですね」。次々と術科教程での課業に対処していくうちに「何て言うか、プロになったっていう感

じなんですよ。習ったり覚えたりやらされたことを腕にしこませていかなくてはいけないのです。私が忘れると兵隊さんはどうしたらよいかわからなくなる。私がぼんやりすると簡単に殺されてしまうのだろう。私が死ぬと兵隊も犬死にさせられるのです。皆、真剣になるのです」。任官が迫り、部下を命ごと預かるという〈将校の役割〉を自覚し始めたことから、自ずと‘学生気分’は消えて軍人らしくなっていく。

また、彼は術科教程では十数名の予備学生をまとめる班長に任命された。「とにかく自分が（年齢は一番）若いから先頭に駆け出していくようにしていましたから、みんなが付いてきてくれたんですけど、……クラス委員精神で一緒にやっとうよって感じで」。ここでも、〈ほどほどの幹部〉になれて張り切る様子、学校生活と軍隊生活との親和性を読み取れる。

##### 「非時局的」な海兵団付海軍将校

12月25日、神田氏は海軍少尉に任官して横須賀海兵団付となる。軍国少年が憧れる海軍将校<sup>20)</sup>。彼は「時代が時代で、士官になるというのは名誉なことですからね。父母にとって初めて長男が、私が軍隊入って、兵隊さんのしょぼしょぼしてんのじゃなくて、将校になれたってことは、弟たちもいるから、そういう点では両親は肩身が広がったと思いますよ」と、いまでも誇らしげに語る。

激戦が予想された硫黄島や、聞いたことのない南方の島を配属先として告げられ驚く同期たちのなかであって、横須賀海兵団に配属となった神田氏は内心大いに喜んだ。しかし、配属先が決まっていなかった者を支援する海兵団の定員分隊の仕事は退屈なもので、翌年2月まで雑務を鬱屈した心情でこなしていた。「（定員分隊の）事務員のことは機械的にどんできちゃうから、私はいちいちのぞいてみても、ああ、一生懸命に書類を書いてんなと思うだけで、しょうがない、特別忙しいわけでもないし暇でもないし、まったく決まった仕事をしてるだけで、朝起

きたら朝の体操を一緒にやらせて終わって、たまにはサボって練兵場に出てこないで隠れて部屋の中に残ってんのなんか捕まえてぶん殴って『早く出てこい』って下らない甲板士官みたいなことやってみたり、これといった用がなくて。……事務員の監督なんて、これという張り合いがなくて、せっかく苦勞した陸戦の知識と実技を生かすチャンスが全くない」。和も日記に「海兵団付の海軍将校ほど非時局的なものはまあないだろうとは、煙草盆での言葉である」（和田 1972: 184）と書いている。

海兵団での単調な日々が続いていたあるとき、三浦半島防備計画を立案する作業に、陸戦専修の将校として神田氏も加わることがあった。「三浦半島全部回って、どことどこって陣地を決めて、U少佐にレポートを出しまして、また自分の持ち場へ帰ってきたんですけど、ああいう仕事があるのに、俺はのん気に事務員の親方やってもしょうがないな、どっか行きたいなと、自分の部下を持った部隊に行きたいなと、ほんとの兵隊さんを手に握った将校になりたいなと思って、ひそかに海兵団を脱出しようという計画を立てたわけですよ」。

#### 特別陸戦隊を志願した二つの動機

昭和20（1945）年2月、神田氏は志願して大船の特別陸戦隊（通称山田隊）付となる。藤森は昭和19年暮れの様子について「特にこの頃本土決戦準備体制が急がれ、陸戦小隊長としてすぐ役立つ館砲出身初級士官の配属要請が人事局に殺到した模様である」（藤森 1995: 247）と回想しているが、こうした状況は年明け以降も続き、横須賀海兵団にも陸戦専修士官の配属要請が来た。神田氏は三浦半島防備計画の立案に携わって以来、海兵団付では苦勞して習得した陸戦専修の技能を生かすチャンスがないという「問題」を抱えていたが、特別陸戦隊を志願することでこの「問題」に対処した。

しかし、すでに戦局の極端な悪化は明らかで、比較的安全な横須賀海兵団付の職を辞したのは、陸戦専修の自分の能力を試してみたいという理想主義的

な動機からだけではなかった。「自分の部下が持っていない将校って、すごく寂しいんですよ。事務員なんか引き連れて戦闘しろなんていっても、普段やっていないから、その連中も訓練とかしてないから、敵が上がってくるような状態になったときは、ろくな兵器もないし、組織もないし、こっちも兵隊さんを手に握って、どういう命令を出すってなこともできないし、えらい情けない状態、惨めなんですよ」と、米軍が上陸したときのことも見据えていたわけである。「安心立命を願うためには、将校なら将校らしい、自分のほんとに信頼の置ける兵隊さんを自分の部下に、手元に握っていたいっていう気持ですよ。……これ、エゴみたいなものかもしれませんがね」。特別陸戦隊を志願した背景には、米軍上陸となったら定員分隊の‘事務員’では戦えないという「問題」に対処する実用主義的な動機もあった。

#### 陸戦専修将校としての活躍

俄作りの陸戦隊のため、当初は隊長と副官の神田氏しかおらず、兵員を迎える前に兵舎の接収から始めねばならなかった。やがて兵員が集まると、新婚生活に忙しい隊長に代わって陣地の割り振りや工法の説明を彼が一手に引き受けた。水兵や予科練出身者を寄せ集めた部隊なので、陸戦が専門の将校は彼しかおらず、古参の中尉からも何かと頼りにされ、陣地構築の進捗確認や本部での副官業務、その合間を縫っては兵員の陸戦訓練を指揮するなど、多忙を極める「課題」の対処に獅子奮迅の活躍であった。

ある日、陣地構築の現場で、兵隊に支給された中古の地下足袋をもらってがんばっていたら足が痒くなってきた。下士官から「海軍に長くなると、水虫はみんな足に持ってます。神田少尉も海軍精神が充実してきたんですよ」と軽口を叩かれる。このエピソードなどは、将兵の間に歴然とした区別をつけ、下士官兵と世間話をするなどもっての外と考えていた海兵出身将校とは違った、さばけた学徒出身将校の存在を物語っている。硬直した海軍組織に風穴を明けたいという彼なりの「問題」意識に対する具体

的な対処として、意識的に下士官兵との交流を図っていたという。

### 戦時下の青春

陸戦隊としての陣容も充実してきたある日、隊長に連れられて若手士官だけの酒宴が催された。「9時か10時になったら、『さあ、引き上げるぞ』って隊長が言うから、みんな引き上げると思ったら、『神田少尉!』って言うから、『はい』ついたら、『貴公は童貞か』って言うから、『もちろんですよ。学校からすぐ海軍へ来たんで、そんないろんなことやってる暇がないから……』つたら、『そうか、じゃあ、貴公も古手になったから、今日、お前は泊まってけ』ってんですよ。……一番まあ綺麗な若手の芸者がいまして、『神田少尉の相手をしろ』って言って、強制的に割り当てられちゃって、みんな帰っちゃったんですよ。二人になって、いやこれ大変だと思って、あそこ軍隊の命令で『上官の命令は朕の命令だと思え』というのあるでしょ。これは天皇陛下の命令で私は今日ここへ泊まらんくちやいけないんだと」。

神田氏と似た状況に直面した学徒出身将校は多かったのではないだろうか。陸軍将校となった中野卓も、中国戦線で上官に「ピー屋」に連れていかれたが「我有日本恋人」と言い逃れ「正直なところ、私には迷惑至極な親切でした」(中野 1992: 179)と述べている。神田氏は軍人勅諭の「下級のものは上官の命を承ること実は直に朕か命を承る義なりと心得よ」という一節を都合よく解釈し、「戦後に友達とか従兄弟なんか集まってその話になると、『俺は、童貞なんか捨てようとは思わなかったけれど、天皇陛下の命令で無理やりさせられたんだ』なんて言うのと、『何を言ってるんだ』ってみんなに言われっけど」と「武勇伝」にしてしまった。番頭や出入りの業者が女郎について熱心に話し込む様子を聞いて育ったので、彼にとって花柳界は身近なものであった。戦前の公娼制度を考慮すれば、軍隊特有の「問題」に悩むことなく対処した彼の選択も理解できる。もっ

とも、今日の価値観からすれば、中野のような対処の仕方が広く共感を呼ぶであろう。

海軍士官は女性にもてた。陣地構築中に大船の雪山で「遭難」しかけ、やっと人家に転がり込んだが、そこにいたのは寡婦と20代後半の姉妹であった。彼は御礼に羊羹を持って再訪し、それから二、三十回は通ったというから秘密のサロンである。娑婆の女性と学徒兵との交際は彼に限った話ではなく、同様の体験を記した手記を散見する。将来を見通せない軍国主義社会にあっては、様々な思惑から学徒兵は厚遇されたのだろう。

部下を率いる憧れの海軍将校となり、副官という〈ほどほどの幹部〉にもなれた。娑婆では女性にもてる。東京の家族は伊那に疎開しているから心配なく、実施部隊とはいえ大船は大きな空襲もないから「のうのうとしてた」。軍国主義社会が瓦解へと突き進んでいった敗戦までの半年を、彼は「山田隊発足して、フンジンとはいかないけれど、その時は私の青春でありました」と懐古する。

### 戦争の不条理

8月15日正午、「玉音放送」を聞くが雑音がひどく、神田氏を始め誰も内容を理解できなかった。夕刻になって敗戦したことを口伝に聞きすが、「ええ、そうか」と思うくらいで、「あんまり仕事しなくてもいいから、ぼやんとしてました」という。

ところが、近接した第三〇二海軍航空隊(厚木航空隊)が戦争継続を謳って叛乱したことで、比較的安穏な軍隊生活を送ってきた彼は、一気に戦争の不条理と向き合うことになる。「僕たちより少し若手の要務少尉が来て、『私たちは厚木から参りました。厚木航空隊はあくまでも戦争を継続します。みなさん厚木に協力して、このトラックに乗って下さい。食糧・弾薬は十分ありますから、武装だけして乗って下さい。何人でも運びますから』って言って来んですよ。『さあ、お願いします、乗って下さい』って盛んに勧める。すごい剣幕で血相が違っている」。

隊長が不在であることを口実に、その場を収めた



彼は、ほどなくして本部に呼び出され、隊長から「厚木行くんだ」と出撃準備の命令を受ける。「そんなら、いまし前に厚木から迎えに来たばっかりに、トラック帰しちゃって惜しいことしました」と答えた彼に、隊長は厚木航空隊を鎮圧する命令だと不機嫌そうに付け加えた。「『えー！』って、ひでえもんだと。で、私もせっかく大きな混乱も起こさせなく事故なく無事に戦争終わってみんな帰れるなどと思ってんのに、陸戦隊と海軍の航空隊が厚木の飛行場の攻防で、生死をかけた争奪戦が展開されることになっちゃったのか、ええことになったって涙を流しながら、終戦のときのショックの倍くらい悲しい、よっぽどこのほうが、私にとってはおっきな悲しい情けないショックでしたからね、泣き泣き部隊に帰ってきました」。

ここで注目したいのは、同士打ちの困難な任務を受けた隊長が言葉少なに「厚木行くんだ」と告げたときに、神田氏は叛乱部隊に合流するものと勘違いした点である。厚木航空隊の叛乱を鎮圧する命令に、彼は「何だよ、厚木の連中の意地を潰したくないのに」という気持を持っていた。叛乱部隊には学徒出身将校も多く加わっており、状況次第で彼も厚木航空隊に同調する可能性が十分にあったと思われる。

一方で、「朝方なんか、見てると、どんどん東海道線を復員列車が走ってましてね。兵隊さんがいっぱい、帰る連中がワーッと喜びながら大船の駅を過ぎてくんですよ。こうやって帰って、無事家へ帰れるのに、俺たちは何だか訳のわかんない連中と殺し合いをしなくちゃいけないのかなと思った」と、叛乱部隊を恨む気持もあった。

叛乱部隊と鎮圧部隊、「どっちもお国のためを思っているのに、何とかならないかと思って困っていました」という彼は、終戦について諸手を挙げて喜ぶことのできない複雑な心境であった。戦争継続は無理であると理解しているのに、厚木航空隊の「意地」というものへの共感が、終戦を素直に受け止めることを妨害していた。叛乱部隊に合流するものと思っ

秘の鎮圧命令で誰にも相談できない彼は、同士打ちの悲劇を回避したいと願いつつも、機銃の訓練を指導するなど鎮圧の準備をしながら待機した。「指揮官は誰だか決まらない、隊長は自分で行くのか、私に任せて一線は私がするのかと思っていましたんですけど、とうとう決まんない状態で、ただひたすら電話がかかって（出撃を）『止めろ』って言ってくれるの待ってましたけどね」。暗澹たる気分で過ごしている数日間のうちに、叛乱部隊を率いた小園安名司令がマラリアで入院し、高松宮などの説得もあって、同月21日に叛乱事件は収束した。

復員準備を再開した神田氏の元に、よく手助けしてくれた兵曹長が訪ねてきた。少尉に昇進するので、階級章に付ける星をもらいたいという。神田氏も余分がなく詫びを言っているうちに「この三、四日のことが胸にせまり涙が出てきて、彼を抱いて泣き出してしまった。……本来、隊長に発足以来の万感をぶっつける気持があったのが、受けてくれそうにないので、一番手近で助けてくれていた彼に気持をぶっつける事になったのであった」。

### 3 考察

前節では、神田氏が軍隊に適應してゆく社会過程を4つのキャリア位相に分けて見てきたわけだが、本節では海軍将校としての彼の〈やる気〉がどのように生み出され、維持されたのかについて考察する。

神田氏が〈やる気〉に満ちて海軍将校の任務を主体的に受け入れていった社会過程<sup>21)</sup>には、①〈軍国少年性〉、②〈反陸軍性〉〈親海軍性〉による反軍感情の中和化、③〈ほどほどの役職〉を社会的‘成功’とする意味づけ、④〈生還という前提〉、⑤〈学徒兵のプライド〉、⑥〈将校の役割〉の自覚といったものが複雑に作用していったものと考えられる。以下、キャリア分析の結果に基づいて順に考察する。

#### ①〈軍国少年性〉

彼は十五年戦争と共に成長した『のらくろ』世代

である。小学校2年生のときに満洲事変が始まり、商業学校2年生のときに日中戦争が始まる。しかし、中国戦線での戦いはいわば遠い異国の戦争であって、都会の学窓で生活している限り逼迫したものとして感じることはなかった。『のらくろ』や戦争物の冒険小説、「水雷艦長」<sup>22)</sup>といった戦争ごっこで培った〈軍国少年性〉は、青年期に入っても軍事学への無邪気な好奇心として燻り続けることになる。

敵愾心とは別個のものながら、彼を〈やる気〉にさせた〈軍国少年性〉は根深いものがある。「米軍を相手に、将校として兵隊を指揮して戦ってみたいという気持は、戦争中にありましたか」という筆者の質問に、彼は「私達は、子供の頃から、兵隊ゴッコは興味のある遊びで、兵卒であったり指揮官になったりの経験を持って育ちました。米軍という大義名分を与えられ、敵と、兵隊という部下、手下を与えられ自由自在に使ってよしい……となれば、男の‘子’でしたら戦ってみたいの当然でしょう」と回答を寄せた。ただし、「好戦的な人物ではありません」とも強調する。

従来の学徒兵研究では、軍国主義の文化に生まれた‘戦い’を憧れる〈軍国少年性〉はほとんど指摘されていない。軍国主義の風潮を批判している学徒兵の手記にこそ、今日の私たちは〈悲愴なわだつみ〉のイメージを読み取るわけだが、神田氏が青春を過ごしていたのは、軍人となって戦場で戦うことを自明視する心性が制度としても文化としても形成されていた時代であった。個人差はあれ、彼の語りから明らかになった〈軍国少年性〉は、学徒兵の〈やる気〉を支えた心性である。

## ② 〈反陸軍性〉〈親海軍性〉による反軍感情の中和化

彼の〈反陸軍性〉は学校生活の悪役となった配属将校との交流から培われた。慶應義塾高等部では、報国隊のあり方をめぐって配属将校との間に「問題」を起こすこともあったが、これは学内自治への軍部の圧迫に抵抗する崇高な反軍的行為ではない。彼が重視する〈ほどほどの役職〉としてのクラス委

員の権限が脅かされたことに対する反抗と理解できる。〈反陸軍性〉が反軍思想まで昇華せず、むしろ〈親海軍性〉を増強する心性として働いてゆくことに注目したい。学生と海軍の接点は少なく、阿川も「そのために無用のイリュージョンをいただいた傾向もある」(阿川 1971: 145)と指摘する。反軍思想という戦時体制そのものに抵抗する思想を培ったならば、海軍でも〈やる気〉など起きなかったであろう。神田氏も軍隊に対して疑問や反感を抱く反軍感情がなかったわけではないが、軍国主義社会の不満をすべて〈反陸軍性〉として括り、海軍を理想化する〈親海軍性〉によって、日々の反軍感情は中和化された。

## ③ 〈ほどほどの役職〉という社会的‘成功’

神田氏にとって社会的‘成功’とは、所属集団のフォーマルな役職を通じて社会貢献し、他者に認められることだ。小学校を起点とする学校生活から培ったこの価値基準が、軍隊に適應していった彼の社会過程を理解する上でキー概念となる。

彼は学生時代の「クラス委員精神」を応用しながら、甲板学生、班長、副官といった軍隊の役職を嬉々としてこなした。彼は硬直した軍隊生活の欠点を見つけては、権限の範囲内で改善しよう心がけていた。彼の面倒見のよさに涙した老兵もいたという。周知のように、軍隊では戦闘よりも日常(内務班)生活で過ごす時間のほうが長い。そうした日常生活の細やかな改善という社会貢献は、まさに「クラス委員精神」でこそ対応できる気遣いが必要である。彼の〈やる気〉は、まず同期の予備学生たちの学習・生活の世話で培われ、任官してからは下士官兵の生活の世話にやりがいを感じることで持続していった。慰問の設定や休暇の調整、手紙の検閲をごまかすテクニックの指南や人間関係のトラブルの解決など、彼が副官として獅子奮迅していた軍務は戦闘でなく‘兵どもの生活の世話’の一言に尽きる。軍隊においても、世話好きな彼は細々とした日常生活の「問題」に対して創意工夫しながら打ち込むこ

とでやりがいを感じ、〈やる気〉が生み出されていたのである。

#### ④ 〈生還という前提〉

青木秀男は「学徒は死とともに生きた。死の道程を辿った生の姿を抉ること。学徒の手記は、読む者にそのことを迫る」（青木 2008: 79）というが、神田氏は戦死について考えることを避けた。彼の場合、「学徒出陣」が決定してからも戦死の意味づけをめぐる懊悩<sup>23)</sup>が生じなかったのだ。その後の軍隊生活に順調に適応できたのだ。特攻隊や苛烈な前線に配属された学徒兵は、ますます戦死の意味づけに苦悩してゆくこととなる。それは青木が考察したような「死の道程を辿った生の姿」であり〈悲愴なわだつみ〉に象徴される姿でもある。しかし、青木が指摘した「悶死と散華」、あるいは森岡や大貫が指摘した「決死の覚悟」といった学徒兵の悲愴な側面が、神田氏のライフストーリーに見出せないのは、まさに戦死の意味づけに懊悩しなかったからに他ならない。戦死の予測を封印し、軍務に没頭する眼前志向的態度によって、彼は軍隊生活にやりがいを見出すことができたのだ。

#### ⑤ 〈学徒兵のプライド〉

‘科学性・合理性’のある海軍といっても、そこには様々な矛盾や「問題」があり、とくに学徒兵は海兵出身の職業軍人から差別的な視線を向けられることもあった<sup>24)</sup>。

しかし、彼は学徒兵の先輩のH中尉から戦争の「助っ人」という〈学徒兵のプライド〉を取得することで、〈親海軍性〉を脅かすような軍国主義社会の不満に遭遇することがあっても〈やる気〉をそがれることなく対処してゆくことができた。彼の場合、軍国主義社会の不満は〈反陸軍性〉⇒〈親海軍性〉⇒〈学徒兵のプライド〉といった順で対処する思考回路が開通し、〈学徒兵のプライド〉はあらゆる問題を積極的に対処してゆく〈やる気〉を培い、維持していった。職業軍人とは一線を画する学徒兵の傾

向を安田が「精神の王国」を守ろうとした精神的貴族主義と指摘したことは既に触れたが、神田氏の〈学徒兵のプライド〉とは軍隊で孤高を持するようなものではない。彼は軍隊生活に適応して、ただその運営の仕方をめぐって、職業軍人よりも‘科学的・合理的’に対処できると考える実用主義的な〈学徒兵のプライド〉でもって精勤していたに過ぎない。

また、〈学徒兵のプライド〉は、学徒兵として自分にはそれにふさわしい役目を果たさなくてはならないという内面的拘束となり<sup>25)</sup>、軍隊での〈やる気〉を維持することになった。

#### ⑥ 〈将校の役割〉の自覚

任官が近づいたある日、彼は部下を命ごと預かる将校の重責に気づく。一兵卒からたたき上げたわけではなく、いきなり実戦に放り出され、部下の命をかけて戦闘指揮を執る〈将校の役割〉の自覚<sup>26)</sup>は、20歳そこそこの青年にとってかなりの重圧だった。歴戦の古兵たちを率いる任官後の様々な不安を払しょくするためには、眼前の軍事訓練を黙々とこなしてゆく手応えだけが頼りであったろう。そうした変化は彼に限ったことではなく、学生時代の想い出話に興じていた仲間も一人、また一人と寡黙になってゆき、それぞれが配属先で戸惑わないよう真剣に課業に取り組んだ。その結果、「プロになったっていう感じ」を持ち始め、将校としての自信と〈やる気〉を培った。

また、任官が決まると実家では近所から祝福され、母親は「お前のおかげで、晴れやかな気分にされた」と喜んで手紙をくれた。彼も「親孝行ができた」と喜んだ。家族や地域社会からの社会的期待に応えながら、将校としての誇りと〈やる気〉を維持していった。

以上、6項目に分けた心性や価値基準などは固定的なものではなく、神田氏が生きた社会的世界で他者や環境、あるいは反省という形の自分自身との相

相互作用によって常に変化する可能性のある関係的なものとして捉えることが重要である。軍国主義社会の下でも、青年は行為者として日々を生きる社会的世界を少しでも居心地のよいものにしようと、自己の置かれた社会的位置の肯定的な意味づけを試み、手が届く範囲での資源・資本を十分に活用し、自分なりに納得のゆく生き方を模索する。こうした試みに「成功」したのが神田氏である。神田氏のケースでは、少年時代から培ったものや、軍隊に入ってから取得した主に6項目の心性や価値基準などが相互に補完し合いながら、軍隊における彼の〈やる気〉を生み出し、維持していたのである。

### おわりに

神田氏が戦争体験を青春として懐古できるのは、〈やる気〉に満ちた彼が当時の戦時体制・軍隊生活に適応でき、かつ過酷な戦闘体験を持たなかったからに他ならない。しかし、戦争・軍隊とは本来不条理なものであり、厚木航空隊叛乱事件は、彼にとって〈悲愴なわだつみ〉同様に懊悩した最初で最後の場面となった。「同期の桜」を高唱し、同じ釜の飯を食った学徒兵に銃口を向けざるを得ないという事態が、22歳の青年にとってどれほどの重圧だったかは、兵曹長相手に男泣きしたエピソードからも推測できる。このような出来事が多発し、あるいは南方戦線にでも配属されていれば、彼の戦争体験の語り方はもっと異なったものになったであろう。凄惨な戦争体験は、戦時下でも輝いた一時の青春について物語ることを困難にする。苛烈な戦闘経験のない者ほどよく喋るといふ批判もあるが<sup>27)</sup>、戦時下の青春というものがどのように戦時体制を支えるものであったのかを理解する上で、彼のように懐古調で語る戦争体験のライフストーリーも重要なのである。

本研究は、神田氏のライフストーリーから学徒が短期間で士気の高い海軍将校となってゆく社会過程を明らかにした。それは、戦争最末期の初級将校不足を補う社会的要請に、青年が生き生きと回収され

ていった実相のリアルな再構成である。‘一高一東大’に象徴されるようなエリート学生たちの思想研究とは異なり、‘庶民的学生’のライフストーリー研究として、「体験者の視点」からユニークな知見を引き出し、戦時体制を支える戦時下の青春の側面を詳細に考察した。

神田氏は「学徒出陣」70周年を迎えた12月の手紙に「(軍隊では) ゆっくり国の行く末を考え、国を憂えるヒマがなく、仕事に追かけ回されていました」と記している。彼の生き方に、明確な愛国心や憂国の情といったものは見出せない。彼の戦争体験をめぐるライフストーリーには、20歳そこそこの青年らしい茶目っ気や、何よりも〈やる気〉が見て取れる。彼の〈やる気〉とは、戦時であれ平時であれ、社会的世界の「課題」や「問題」に対処すべく、楽しくたくましく生きようとする生き方ではないだろうか。そうした生き方を一般化すれば、戦時下という社会システムのなかで少しでも居心地の良いポジションを目指し、人生の各キャリア位相で直面する課題・問題にポジティブに対処してゆく実践といえる。

筆者は、戦時下の日々において‘楽しくたくましく生きること’が、青年たちの向き合っている社会的世界で戦時体制を維持する結果になっていることを指摘したい。〈やる気〉といった青年らしい美点が、戦争という歯車を回す‘潤滑油’になっていることを強調したいのだ。青年の青春に象徴される人間の生き生きとした活動、善意や誠意といったものが、戦時体制にことごとく回収されてしまうメカニズムこそ、本研究が神田氏のライフストーリーから捉えた戦争のリアリティである。

### 付記

本研究は日本オーラル・ヒストリー学会第12回大会(2014年)にて「将校になる——ある学徒兵のライフストーリー」と題して行った報告に基づいて執筆したものである。

### 謝辞

神田広志氏と神田夫人には、本研究のために多大な



御協力と御支援を賜りました。誠心より感謝申し上げます。

## 注

- 1) 戦没学徒兵の悲愴な印象は、日本戦没学生記念会が編んだ『きけ わだつみのこえ』によるところが大きい。しかし、同書についての評価、あるいは‘わだつみ観’といったものは必ずしも一定のものであったわけではない。戦後社会における同書の評価と‘わだつみ観’の変容については、福間(2009)を参照。
- 2) 本研究は、シカゴ学派社会学の系統につらなる社会的世界論を理論的パースペクティブとして応用している。基本的な社会的世界のイメージは、ある具体的な状況の場において行為者が多様な他者や環境と絶えず相互作用を行っているダイナミックな社交空間である。こうしたミクロな社会的世界は、近接する社会的世界と相互作用しながらマクロな社会的世界を構成している。初期シカゴ学派社会学のモノグラフにおいては、社会的世界は調査対象のフィールドそのものを指す限定的な概念であったが、今日では行為者の視点を企業や国家レベルに置き換えてマクロな社会的世界を捉えようとする考え方もある。本研究が念頭に置いている社会的世界は、ある学徒兵の視点から捉えたミクロな社会的世界であるが、行為者の精神ではマクロな戦時体制下の社会的世界も意味世界として把握されており、そうしたマクロな社会的世界は制度や文化といった形でミクロな社会的世界における個人の行為に影響する。社会的世界論については宝月(2010)を参照。
- 3) 「学徒出陣」した学生数については諸説あるが、蛭川壽恵は約5万人とし、陸軍に3万3602人、海軍に1万4280人が入営したと推計する(蛭川 1998: 66-7)。
- 4) 海軍予備学生とは海軍予備士官を養成する制度で、受験資格は高等専門学校卒業以上である。例えば、昭和10年の高等教育機関の卒業者は、初等教育卒業者に対して男性では5%程度なので(天野 2006: 247-9)、中等学校の卒業者(同14%程度)に幹部候補生の受験資格を認めた陸軍に比べ、海軍に集った学徒たちの学歴エリートぶりは際立っている。神田氏は海軍兵科第四期予備学生に採用された3355名の一人である。出身大学別では、慶大は東大と早大に次いで海軍への入営者が677名と多く、兵科予備学生採用者にとっては356名で、これは東大に次いで2番目の多さである(蛭川 1998: 92-3)。なお、階級は兵曹長の上で士官服を着用する。
- 5) 神田氏ら「学徒出陣」組の予備学生は昭和19年12月25日に海軍少尉となる。戦争最末期において「海軍とくに少尉にあっては海兵出を極端に温存し、まず消耗品としての学生出身予備少尉を先に死地に送った事実はいなみがたく、海軍当局者の非情さを思わざるを得ない」(山口 2000: 4)という指摘は見逃せない。とくに、特攻隊員となった「海軍少尉の九九%は実に学生出身者によって占められていた事実」(同: 214)は、彼らが一兵卒とはまた異なった困難に直面していたことを物語る。蛭川の推計によれば、「学徒出陣」組の戦没学徒兵は約4600名(蛭川 1998: 137)。慶大出身の海軍予備士官677名中61名が戦没し、兵科予備学生の同期となった同窓生356名中22名が戦没している(同: 93)。
- 6) 森岡氏については渡辺(2013)を参照。
- 7) 京大法学部2年生のときに「学徒出陣」した藤森は入団後も詳細な日記を書き続けた。藤森は武山海兵団における予備学生基礎教程では第10分隊第4区隊所属となる。同分隊5区隊所属の神田氏は藤森のことを覚えていた。術科教程で藤森は対空班、神田氏は陸戦班となるが、両班とも館山海軍砲術学校で教育を受けた。ときに書かれた詳細な記録性と、予備学生教程では神田氏と同じような環境にいた点から、本研究ではとくに藤森の手記を参照した。
- 8) 慶大は白井厚を中心に学徒兵研究が進んでいる。白井ゼミが1990年代に行った共同研究では、太平洋戦争中に大学・予科・高等部に在学していた7500名の同窓生にアンケート調査を行い、1681名から回答を得た(回答率22.4%)。そのなかに「学生時代には、太平洋戦争についてどのように考えていましたか?」という設問があり、回答として「a. アジア解放の聖戦(正義の戦い) b. 自衛のためやむをえぬ戦い c. 勝てるはずのない戦

- い d. 帝国主義戦争 e. その他」という選択肢を用意した。すると、「自衛のためやむをえぬ戦い」と答えた者が全体の61%を占める結果となった。次いで「勝てるはずのない戦い」が18%、「アジア解放の聖戦（正義の戦い）」が8%、「帝国主義戦争」が4%と続く（白井監修 1999: 73-87）。この設問に答えるとするならば、神田氏は「c. 勝てるはずのない戦い」を選ぶとのこと。
- 9) 慶應義塾では昭和16年9月に報国隊を結成し、翌年10月には報国団を結成した（報国隊はその行動隊）。当時のクラス名簿を見ると、例えば「第三学年A組（報国隊高等部隊第一中隊第一小隊）」と軍隊式の編制が併記されている。神田氏が高等部に在学していた間は、インタビューで言及されたようにアルファベットのクラス名が消滅するといったことはなかったようである。なお、彼は報国隊の幹部には選ばれなかった。彼はその理由を「当時の配属将校H大佐に、私が気に入られてなかったせいです」と考えている。
- 10) 神田氏は、雨に濡れて見送ってくれた女学生の姿がとくに印象に残っているという。「女学生たちがいっぱい並んで、私たちを見送って拍手してくれてるわけですね。……雨がもろに降ってくるんだから、気の毒だな、寒くて風邪して、もし肺炎でも起こしたら、申し訳ないじゃないのかと思いましたよ、気の毒にと思って。で、場外出るところ辺りの最後のところになると女の子たちがみんなワーッと立ち上がって、フェンスのどこまでワーッと降りてきて、手を振ったり拍手したり、隊伍が壊れて、ワーッと行って、口々にいろいろ言ってきたのは感激っていうかね、ご苦労さんと思ってましたよ。千代田女子専門学校の1年生だった杉本苑子は、当日の体験を「学生たちが去って行くとき、かちかちに感激してしまいました。涙をボロボロこぼし、わあわあ泣きながら、みんなは、なだれをうったように学生たちの方へ駆け出しました。……あの日、行く者も残る者も、ほんとうに、これが最後だと、なんというか、一種の感情の燃焼がありました。この学生たちは一人も帰ってこない、自分たちも間違いなく死ぬんだと」（杉本 1973: 131）と述べている。
- 11) 答辞を読んだ江橋慎四郎は当時を振り返り、
- 「僕だって生き残ろうとしたわけじゃない。でも、『生還を期せず』なんて言いながら死ななかつた人間は、黙り込む以外、ないじゃないか」と戦後の沈黙に言及した上で、「教授に添削されたが『生還を期せず』は自分で考えた言葉だった。『最大の誤りを犯しているのに、マスコミも国民も、自分も軍部の意向に乗った』と述べている（2013年10月21日「毎日」）。
- 12) 神田氏は「家の近所の、親一人子一人の米屋があって、その一人息子が親孝行で、ほんとに、どっから見ても立派な息子だったんだけど、それが兵隊に、召集が来て、行くときに、母親はもうワーワー泣き、息子も行きたくなくてワーワー泣いて出かけたんですね。したら、間もなく戦死しちゃったんですけどね。……だから、あまり、そんなときに、死にたくないっていうことを言っちゃいけないなと思いましたね」と語っているように、戦死について考えなかつたわけではない。縁起をかついで、戦死ということを考えないことにしたに過ぎない。その意味では、やはり神田氏も「決死の世代」（森岡 1993）の一人であった。
- 13) そうした配慮があっても逃亡する者はおり（和田 1972: 111）、海軍に軍隊特有の厳しい生活がなかつたわけではない。
- 14) 大竹海兵団で新兵教育を受けた和田も日記に「とうとう一度もなぐられることなしに二等水兵を卒業することになった。長かつたくせに存外あつてなかつた」（和田 1972: 134）と書いている。しかし、同じく大竹海兵団で新兵教育を受けた森嶋によれば、自身は医務室に通っていて免れたが「友人たちは精神棒でなぐられて悲鳴をあげていた」（森嶋 2007: 163-4）時期があつたという。舞鶴海兵団で新兵教育を受けた藤森は日記に「何人かの者が甲板棒で殴られた。力を出し惜しんだり何回教わっても要領をのみ込めない者が犠牲になる」と書く一方、自身は「さして不快なこともなく、世に言う陰湿な処分を一度も受けずに、海軍初期の過程が終了した」と書いている（藤森 1995: 57, 81）。これらの証言から推測するに、新兵教育で制裁は完全になかつたわけではないが、神田氏のように制裁を受けずに済んだ者も多くいたと思われる。この点、新兵教育と言っても陸軍

- の初年兵教育とは異なるものであった。ただし、藤森が「一日冷え切った体を温める入浴は、熱く入れず洗い湯をかぶっただけ。新兵の分際ではバス係の一等水兵に文句も言えないので、この手の悪質な新兵いじめがあるという」(同: 69)と書いているように、食卓番のときなどに烹炊所の古兵からいじめを受ける程度のことはあったろう。
- 15) 蜷川によれば、「学徒出陣」組の入団者のうち、予備学生・予備生徒・見習尉官になった者は7割前後と推定され、選にもれた者は下士官候補生として教育を受けることになった。また、予備学生になった者でも2割ほどが罷免され(蜷川 1998: 99)、二等水兵に戻される者もいた。神田氏も「予備学生になってから、学科試験なんかで極端にできないのが何人かいて、僕たちが体操に行ってる間に、そいつは行かなくて、僕たちが体操から帰ってきたらいなくなっちゃった。棚の中が空っぽになっちゃって、何にも荷物がなくなっちゃって、『あれ、あいつ、どうしたんだ、いないじゃないか』というな、他の分隊の話を見ました。罷免って言葉、その言葉は、ほんとに怖い言葉だったすね」という。
- 16) 藤森も「学生の襟章(階級章)のついた士官服を着て短剣を吊ると、二等水兵から一挙に七階級飛び越えて士官様の誕生だ。まるでルンペン変じて王子誕生の図で、頭が混乱する程だ。……大鏡の前で敬礼の練習などして、晴れの我が姿に見られる者もいる」(藤森 1995: 96)と書いている。
- 17) 藤森は鉄拳制裁について憤りを書く一方、「然し修正をしてカラッとする教官はむしろ爽やかで、長時間の説教より余程ました」(藤森 1995: 160)とも書いている。教官と学生との間に信頼関係があるかないかで、鉄拳制裁についての意味づけは大きく変わるようである。
- 18) 神田氏が私淑するH中尉の激励のエピソードは軍部批判が込められており、迫るものがある。軍部が勝手に始めた戦争で亡国の危機に陥ったとき、学徒が無条件に手助けにいくしかないという任侠的愛国心の言説は理解しやすい。初めての軍隊生活に戸惑う後輩たちを思いやる愛情も伝わってくる。ただ、「戦争の助っ人」という〈学徒兵のプライド〉は、戦争の正当性に対する疑問を性急に解決してしまったようにも思われる。
- 19) 藤森も「軍制、軍事学の座学、参考書配布され興味津々」(藤森 1995: 101)と書いている。
- 20) 士官でも戦闘指揮をする兵科の士官は将校とも呼ばれる。神田氏は海軍将校となれたことを誇りに感じている。
- 21) 学徒兵が主体的に特攻隊員の任務を受け入れていった過程を分析した森岡は、①納得のゆく戦死の意味づけ、②任務遂行の旺盛な責任感、③戦友との連帯感、④親きょうだい、妻・婚約者の存在が彼らの支えになったとする(森岡 1995: 284)。決死の覚悟をしないで済んだ神田氏と比べてみても、特攻隊員となった者に特有なのはやはり死生観、戦争観の切実な探求であったことがわかる。
- 22) 学徒兵の〈軍国少年性〉を象徴するような神田氏のエピソードがある。「私たちが、海軍の予備学生の試験に合格して、二等水兵の兵舎から学生舎に移り、これから指名点検を受けるまでの少々の時間に、軍帽を横に冠っている連中が、二、三人、汗だくで駆け回っているのがいる。こんな短い時間に、まだ顔を合わせたばかりで、皆が夢中になっている。‘水雷艦長’だ。専門学校、高等学校、大学予科を卒業した連中ばかりだが、ジャンケンポンを初めて、夢中になっているのに驚かされた。横須賀海兵団の一時だった。海軍の上の方の上官連中は、大勢の兵を集めると、整理整列をさせるのが上手にできない。いつまでも兵隊を並べたり、四列に並べたり、二列に変えたりしている。その暇にゲームができたのだった。この‘水雷艦長’をやっていた連中、それを眺めて『あいつら、本当に好きだなあ』と言った仲間たち、ぼろ船に乗せられ、水漬く屍となり、残ってもほとんど九十歳を迎えて老残の身を保ちながら、なお意気高いものがある」。
- 23) 藤森は昭和18年10月24日の日記に「私は軍隊に入ることが即『死』と単純には割り切れないが、……戦の前途を楽観視できる要素は少ない。そのような戦の場に出て行く我々に『生還』など期待できるであろうか。……今回の徴兵猶予停止措置発表以来、私は自己の『死』についてかなり深刻に考え、懊悩を繰り返してきた。然しそれは抽象的な『生命』『死』の範疇にしか思考が及ばず、具

体的な自分自身の終焉という切迫感はどうしても湧いてこない」(藤森 1995: 22-3)と書いている。「学徒出陣」が決まった時期、本土空襲は本格的に始まっておらず、戦死の予想も学窓の内にいる限り切迫感がなく、神田氏のように戦死について考えないということも可能な環境であった。なお、藤森は新兵教育期間の日記には「入団以前深刻に考えた生死の問題については、今尚脳裏をかすめるが、……諦観と同時にそれをじっくりかみしめる時間的精神的ゆとりはない。……周囲の仲間は誰一人そんなことは口にもせず、すこぶる陽気で、その雰囲気流されて切迫感次第に遠のく」(同: 58)と書いている。武山海兵団で合流した神田氏も「すこぶる陽気」な仲間の一人であつたろう。

- 24) 予備学生教程では規則違反が見つかった場合は「全員修正」となり、学生隊長から海兵出身将校と比較して「士官服を着た猿」(藤森 1995: 125)と罵られることもあった。任官後も海兵出身将校と学徒兵との間に生じた確執は特攻隊とくに強く、海兵出身将校に負けまいと軍務に精勤し、学徒兵は優秀な将校として軍隊を支えていった。なお、神田氏が所属した陸戦隊では、ほとんどの士官は一兵卒からの叩き上げの特務士官か学徒出身の予備士官だったので、海兵出身将校との確執はとくに感じなかったという。
- 25) 大船にいたころの宴席でのエピソードからも、神田氏が学徒兵であることを強烈に意識していたことが理解できる。「若手だけで一杯飲もうよって集まって隊の中で宴会したら、……『勘太郎月夜唄』って歌があるんですね、そんなときの流行歌が。これを若手士官全員で歌えてんですよ。僕は『街の演歌なんか歌うな』と、『われわれは学生出身の将校なんだから、街の演歌なんか歌うな』つって断固反対して、……二、三人の高等学校卒の寮歌を歌うやつがいるだろう、なければ早稲田か明治くらいがいるだろう。せめて、母校の校歌を歌え……と命じたのです」。
- 26) 中野も「私が秘かに自分に与え得た任務は、私の指揮下に入った兵隊さんたちを死なさず怪我させず日本へ連れて帰るように務めることだったのです」(中野 1992: 138)と回想している。部下を

命ごと任される(将校の役割)の自覚によって、軍務に精勤した学徒兵は多くいたであろう。

- 27) 日本の軍人像をめぐる対談で、村上兵衛は「いちばんひどい戦闘を、やって来た連中なんです、もう彼らは戦争のことは思い出したくないといいますね。いやだという。そんなにひどくない、一歩手前の戦闘をやった連中は、それに対して『お前はいい体験をしたよ』といえるんですね。微妙な別れ目だと思えます」と発言し、須崎勝弥は「語りたくない、というのは本当のことばだと思いますね。ペラペラ喋る奴は、私も含めてたいした戦闘経験もしていない連中です。……私達は戦争を青年の時期に体験してしまった。……体験に意味があるとすれば何でしょう、既に博物館に埋もれた話を懐古的に語るだけなら、のろけにしか過ぎません。私は思うんです。人間は生と死の二つの極点の間を彷徨って生きている。その時々、どの位置に立って考え行動するかで、かなりのちがいが出てくる筈です。だとしたら、かつて、かなり死の極点に近い位置に立って思考したということにこそ個人の体験として意味があるとでも言うのでしょうか」(村上・須崎 1968: 26-7)と答えている。対談が行われたのは戦争体験も生々しい記憶として残る戦後23年目のことなので、「死」という側面に注目するのは当然であり、こうした視点に基づいて多くの戦争体験をめぐる記録が蓄積されてきた。一方で、「生」の「極点に近い位置に立って思考した」個人の体験は、感情的に「のろけ」話として真剣には受け止めてこなかったのではないだろうか。戦後70年という長い年月が過ぎてようやく「のろけ」話からも戦争と向き合えるようになったのかもしれない。そうした意味では、本研究は「生」の側面から戦争体験に迫る試みである。

#### 参考文献

- 阿川弘之, 1971, 『作家の自画像1 私のなかの海軍予備学生』昭和出版。
- 天野郁夫, 2006, 『教育と選抜の社会史』筑摩書房。
- 青木秀男, 2008, 「悶死と散華の間——戦没学徒の意味世界」『部落解放研究』14: 79-94。
- 藤森耕介, 1995, 『ある学徒出陣の記録——海軍兵科



- 予備学生 改訂版) (自費出版)。
- 福間良明, 2009, 『『戦争体験』の戦後史』中央公論新社。
- 船津衛・宝月誠編, 1995, 『シンボリック相互作用論の世界』恒星社厚生閣。
- 林尹夫, 1980, 『わがいのち月明に燃ゆ』筑摩書房。
- 平山浦生, 2000, 『私の生涯●喜寿記念』(自費出版)。
- 宝月誠, 1990, 『逸脱論の研究』恒星社厚生閣。
- , 2004, 『逸脱とコントロールの社会学』有斐閣。
- , 2010, 「シカゴ学派社会学の理論的視点」『立命館産業社会学論集』45(4): 45-65。
- 星野芳郎, 2006, 『戦争と青春——「きけ わだつみのこえ」の悲劇とは何か』影書房。
- 岩井忠正・岩井忠熊, 2002, 『特攻 自殺兵器となった学徒兵兄弟の証言』新日本出版社。
- 海軍兵科第四期予備学生会名簿編纂委員会, 1993, 『海軍兵科 第四期予備学生 第一期予備生徒名簿』。
- 慶応義塾, 1964, 『慶応義塾百年史 中巻(後)』(非売品)。
- 増間作郎・菅原権之助, 2002, 『二人の海軍特年兵の記録』光人社。
- 森岡清美, 1993, 『決死の世代と遺書 補訂版——太平洋戦争末期の若者の生と死』吉川弘文館。
- , 1995, 『若き特攻隊員と太平洋戦争——その手記と群像』吉川弘文館。
- , 2013, 「戦争社会学と戦中派経験」福間良明・野上元・蘭信三・石原俊編『戦争社会学の構想——制度・体験・メディア』勉誠出版, 3-22。
- 森嶋通夫, 2007, 『血にコクリコの花咲けば——ある人生の記録』朝日新聞社。
- 村上兵衛・須崎勝弥, 1968, 「死と、軍人の精神構造」『シナリオ』24(9): 23-31。
- 中野正大・宝月誠編, 2003, 『シカゴ学派の社会学』世界思想社。
- 中野卓, 1992, 『『学徒出陣』前後——ある従軍学生のみた戦争』新曜社。
- 日本戦没学生記念会, 1995, 『新版 きけ わだつみのこえ』岩波書店。
- , 2003, 『新版 第二集 きけ わだつみのこえ』岩波書店。
- 蜷川壽恵, 1998, 『学徒出陣——戦争と青春』吉川弘文館。
- 西山伸, 2008, 「『学徒出陣』——その『語られ方』の歴史と今」『教育史フォーラム』3: 35-50。
- 大濱徹也・小沢郁郎編, 1995, 『改訂版 帝国陸海軍事典』同成社。
- 大貫恵美子, 2003, 『ねじ曲げられた桜』岩波書店。
- , 2006, 『学徒兵の精神誌』岩波書店。
- 岡田英雄, 1992, 『学徒出陣——航海士の手記』中日出版社。
- 岡田裕之, 2009, 『日本戦没学生の思想——〈わだつみのこえ〉を聴く』法政大学出版局。
- 佐々木八郎, 1981, 『青春の遺書』昭和出版。
- 白井厚監修, 1999, 『共同研究 太平洋戦争と慶應義塾』慶應義塾大学出版会。
- 杉本苑子, 1973, 「三十年をはさんだ青春群像」『サンデー毎日』52(44): 131。
- 宅島徳光, 1967, 『遺稿くちなしの花』大光社。
- 鶴見俊輔, 1968, 「戦争と日本人」『朝日ジャーナル』10(34): 4-10。
- 和田稔, 1972, 『わだつみのこえ消えることなく』角川書店。
- 渡辺祐介, 2013, 「『戦争』から逃れることの困難性——ある逃亡兵のライフストーリー研究」『日本オーラル・ヒストリー研究』9: 138-152。
- 山口宗之, 2000, 『陸軍と海軍——陸海軍将校史の研究』清文堂出版。
- 安田武, 1977, 『学徒出陣 新版』三省堂。
- 吉田満, 1981, 『戦艦大和ノ最期』講談社。

#### 新聞記事

「学徒出陣70年<sup>①</sup> 『生還を期せず』に悔い」(2013年10月21日「毎日新聞」朝刊)

#### 参照資料

報国隊高等部隊幹部名簿 (コピーの一部)

## Life Story Research on a Student Soldier Adapting to Military Life

WATANABE Yusuke<sup>i</sup>

### **Abstract :**

Seventy years have passed since the time of the “student draft” in Japan. Previous research on student soldiers has focused mainly on those who became kamikaze pilots, and it highlighted the anguish that those student soldiers experienced as they sought meaning while facing death in battle. However, the war experiences of student soldiers who, unlike kamikaze pilots, could conduct their roles diligently without thinking deeply about death in battle, and who were highly motivated to carry out their assignments, have been largely neglected. Thus, our understanding of their experiences, as they supported the war effort as basic officers of the military in the final part of the Asia-Pacific War, has yet to be developed. This study analyzed the social process of one student, who initially felt doubtful and resistant toward the war and the military, but eventually became fully motivated after the student draft. His story demonstrates that his motivation was not related to patriotism or concern for his country, but arose from his desire to deal effectively with his life tasks and problems while seeking a slightly more comfortable position within the wartime social system. From his life story, we can understand vividly how people’s desire to live happy and positive lives and to remain full of motivation was connected with the maintenance of Japan’s wartime system within society.

**Keywords :** student soldiers, student draft, war experiences, naval officer, life story, career analysis

---

i Research Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University